

荻生徂徠の経済構想

—新井白石との比較を手掛かりに—

許 家 晟

はじめに

徂徠学は「学」と呼ばれるだけのことはあり、先行研究が積み重ねられてきた。平石直昭氏は「戦中・戦後徂徠論批判—初期丸山・吉川両学説の検討を中心に—」^[1]を著し、これを総括的に論じている。彼は尾藤二洲の「其学タゞ理民ノ術ノミニテ、自己ノ身心ハ置テ問ハザルナリ^[2]」という視点を「道德対政治」という図式の嚆矢と捉え、丸山眞男の「作為の論理」もそこから見いだされたと分析した。しかし、平石氏の言うように、丸山の徂徠論は「徂徠における『近代』だった^[3]」。そして、平石氏は「(丸山)氏以上に徹底して『近代』の視角を徂徠分析に貫いたのであった。その「視角」から、今まで丸山の流れを汲む徂徠論のほとんどが、この「近代」を前提としていたものである。

この前提に基づき、丸山眞男は新井白石の経済と政策論を「公家的礼治主義^[4]」であり、荻生徂徠のそれを「復古的であり、農本的な自然経済であり、反貨幣経済である^[5]」としてしか評価していなかった。この流れは最近まで続いている。たとえば、渡辺浩氏が『日本政治思想史』の中で丸山論を批判しながらもこう述べている。徂徠の思想は「歴史観として反進歩・反発展・反成長である。そして反都市化・反市場経済である。個々人の生活については反『自由』にして反平等であり、被治者については反『啓蒙』である。そして政治については反民主主義である。そういうものとして見事に一貫しているのである^[6]」。

一方、近年ではこのような流れに対する批判もなされている。吉岡孝氏は「近年諸学においては『近代のまなざし』からの解放とでもいうべき状況が進行している。理性や進歩といった近代社会で支配的な価値から対象事例を位置づける系譜論的発想を排し、対象とする世界の内在的秩序を先ず直視し、そこから出発して近代的価値観を相対化していくという構想である^[7]」と述べたあと、「日本史学はこのような動向から最も遠い」と批判する。直近のものとしては、丸山眞男以来の徂徠研究は「思想史的に徂徠学の論理構造の解明に向かう^[8]」ていて、「政治学としての徂徠学が現実をどうとらえ、いかに対処しようとしていたのか、政治史的経済史的考察がなおざりになっている^[9]」という吉田俊純氏の意見があり、筆者もこれに賛成する。

本稿は、こうした研究状況の中、荻生徂徠と新井白石の意見の対立するところを取り上げ、そのうえで、両者の政策論とその思想的関連、特に荻生徂徠の武士土着論と彼の経済論との関連について分析する、一つの試みである。

また、結論からいうと小論では、前述の先行研究に反して、新井白石も荻生徂徠も経済に対する鋭い洞察を持ち、その政策立案は当時の社会的諸条件に基づいた具体的なものであったこと、そして今まで誰にも注目されなかった、荻生徂徠の政策論の中心である「武士土着論」が彼の経済論と密接に関係していること、以上二点を指摘する。

1. 新井白石の貨幣論

元禄8年（1695）徳川幕府は、日本史上初の大規模貨幣改鑄を行った。それに伴って発生したのが、貨幣政策から経済全体に関わる意見対立である。それをめぐって幕府に直接立案することのできる二人の儒学者、すなわち新井白石と荻生徂徠が、まったく異なった認識と意見を見せていた。

まず白石の場合、荻原重秀の貨幣改鑄による出目獲得策に対する、激しい怒りと凄まじいほどの弾劾は広く知られている。今までの通説では、白石は儒教的道徳観に基づき荻原重秀を批判したとされる。だが近年の研究では、白石が実質的に貨幣数量説に等しい考え方を持っていると評価した研究もあった^[10]。

白石は実際どのように考えていたのか、まずそれを確認しよう。

元禄改鑄によって流通貨幣の純金含有量が30%以上も減少されたことについて新井白石は次のように論じた。

当時天下の財用通じ行はれ難く候て、万物の価高くなり来り候事、天下の商賈其言を、金銀の品下り候に仮り候て、其利を競争ひ候により候へども、真実は世に通じ行はれ候金銀の数、そのむかしよりは倍々し候て、多くなり来り候故にて候。

（『白石建議』四^[11]）

世間一般ではインフレはすべて元禄改鑄による「金銀の品下り」とであると認識されていたのに対して、彼自身はそのようには思っていない^[12]。「真実は世に通じ行はれ候金銀の数、そのむかしよりは倍々し候て、多くなり来り候故にて候」という白石の認識は、貨幣供給量が倍増することによってその価値が大幅に下落し、対して物価が騰貴したという主張である。これは、貨幣と物流との関係で物価を操作する考え、すなわち、貨幣数量説的な考え方とみて間違いなかろう。もちろん、白石は市場に流通している貨幣の総量のみを問題と

して、その流通速度などについては、一切触れていない。なぜなら、このことは当時において、ほとんど認識不可能な概念だからである。

白石は続けて説明する。

凡そ天地の間に生じ候ほどの物、其品貴きものは必ず其数少く候故に其価も高く、其品賤きものは必ず其数多く、其数多く候故に其価もやすく候事、相定りたる事に候へば、当時の金銀其品下り其価軽くなり候故に、これを以て換候所の万物の価は重くなり候と申候はんも、又当時の金銀其数多く其価軽くなり候故に、これを以て換候所の万物の価も重くなり候。

(『白石建議』四)

ここの「当時の金銀其数多く其価軽くなり候故に、これを以て換候所の万物の価も重くなり」という記述から、白石は、インフレとは貨幣価値の下落による物価の相対的上昇、つまりマネタリストの所謂「貨幣的現象」である、という認識を持っていたと考えても差し支えあるまい。

しかし、重要なのは、白石は単に原理原則に基づいて、あるいは道徳的な理由だけで元禄改鑄を批判していたわけではないということである。

凡そ物の価重く候事は、貨の価軽きにより候て、貨の価軽くなり候事は、其数多きが故に候へば、法を以て其貨を取めて其数を減じ、又物の価軽く候事は、貨の価重きにより候て、貨の価重くなり候事は、其数少きが故に候へば、法を以て其貨を出して、其数を増し、貨と物とに軽重なきごとくに、其価を平かにし候時は、天下の財用ゆたかに通じ行はれ候由、相見え候。もし此説に拠り候はゞ、当時万物の価の重くなり候事疑ふべからざる事にて候。

(『白石建議』四)

最後の「もし此説に拠り候はゞ、当時万物の価の重くなり候事疑ふべからざる事にて候」という意見で示されているように、彼は物価上昇の原因がマネーサプライの過剰にあると断定した。さらに注目すべきなのは「貨と物とに軽重なきごとくに、其価を平かにし候時は、天下の財用ゆたかに通じ行はれ候」という白石の主張である。これは貨幣数量説的な考えに基づいた物価安定の重要性を説いているのであって、単に金銀の品位を慶長の時に戻すことだけを主張したのではない。

また、ここでもう一つ注意しなければならないことがある。それは、当時の幕府財政における構造上の事情である。

幕府の基本財源が年貢米であることは贅言する必要もないであろう。しかし、幕府といえども、支出の際は、米で支払うのではなく、金銀を用いなければならないケースも多々ある。もちろん白石も、この事を見落としたわけではなかった。

又近年以来米ノ価高くなり来り候につきて、年年の御切米の時被下候御金の数も増し来り候由、承及候。
（『白石建議』四）

このように、彼は石高を現金に換算して支給する事例を持ち出した。そこからもわかるように、この特殊な構造故、米価の高騰は一般市民のみならず、幕府自身の財政にとっても負担になるのである。

したがって、白石はマネーサプライを減少させ、金銀の品位を慶長の時に戻すよう、幕府に進言した。そして、時の幕閣は白石の提案を受け入れ、金銀の品位を慶長に戻すことにした。しかしその結果は失敗に終わった。元文年間に幕府は再び金銀を悪鑄しはじめ、流通金銀の名目貨幣化を幕末まで一貫して堅持していた。その原因はどこにあるのであろうか。

2. 白石の問題点と荻生徂徠の意見

まず、白石の主張自体には矛盾があり、彼自身もそのことに気づいていなかったようだ。

天下の人、各其宝を失ふべき事を惜み候て、当時に通用すべきほどの数をはかり候て、出し替候ひしかば、蔵め貯候て、出来り候はぬ所の数は出し替候所の数より万々倍し候べし、然らば当世に通行し候所の金銀、其数を増し候ごとくには候へども、却て其数を減じ候ごとくにはなり候。
（『白石建議』四）

この中にある「却て其数を減じ候ごとくにはなり候」という言葉は、前出の「当時の金銀其数多く其価軽くなり候故に、これを以て換候所の万物の価も重くなり候」という意見と矛盾していることを、白石は気づかなかったのであろうか。つまり、もし白石が主張したように、グreshamの法則により良貨が退蔵されたのであれば、そもそも市中の通貨総量が増えることはないし、インフレも発生することがないはずなのである。

さらに、白石の考案した良鑄の際にあたっては、一時的な措置である金銀と紙鈔との併用も実現できなかったため、インフレ対策のはずの良鑄が、一気にデフレを引き起こすこととなった。

一方、元禄のインフレに対し、荻生徂徠は全く別の見解を表している。

諸色の高直に成たるは、全く元禄の時に金銀に歩を入れて、金銀の位悪敷なる故に、高直成たるにも非ず。又金銀の員数ふゑたる故に、高直に成たるにも非ず。

(『政談』巻二、金銀銭の員数減少したる子細の事^[13])

これは、物価上昇の理由は改鑄によるものではないという徂徠の明白な主張である。そして、真の原因について、徂徠は次のように説明する。

金銀の員数を元禄正徳の頃に比すれば、半減より内に成たれ共、慶長の昔に返りたるゆへ、慶長の頃のごとく世も過やすき筈也、金銀の位もよく成たれば、諸色も下直に成筈の事なれ共、町人共のいたづらにて諸色の直段をさげぬといふ人あれ共、是また世の有様を知らぬ人の云事也。慶長の頃より今日に至ては、既に百年に及ぶ。其時よりは段々に世上の人、高下貴賤に不限、人々の身持・家の暮し不覺奢に成り、今は又其奢世の風俗と成て、世界の常となるゆへ、是をやむべき様なし。

(『政談』巻二、金銀銭の員数減少したる子細の事)

貨幣の状況を慶長の時代に戻したのに、なぜ生活は戻らないのか、それは商人どもがあこぎな商売をしているからであるという意見に対し、徂徠ははっきりこれを否定していた。原因は商人が値下げを拒んでいるからではなく、「慶長の頃より今日に至ては、既に百年に及ぶ。其時よりは段々に世上の人、高下貴賤に不限、人々の身持・家の暮し不覺奢に成り、今は又其奢世の風俗と成て、世界の常となる」こと、すなわち、慶長年間に比べ、消費が拡大したことこそが原因であると徂徠は考えていた。

ここで、徂徠の考えを詳しく分析しよう。

只今金の員数、元禄金・乾金の時分の半分に減じ、銀は四宝の時の三歩一なり。されば諸色の直段、元禄金・乾金の時分の半分より内にさがらねば、いまだ本の位に非ず。

(『政談』巻二、諸色の直段の事)

以上の内容から、徂徠は市中の貨幣流通総量が半減したのであれば、物価も半減しない限り、物価は実質的には上昇したことになると説明した。これは、徂徠も白石同様、貨幣数量説的な認識を有していることを示している。しかし、白石と違って、徂徠は物価の上昇を貨幣的現象としてとらえるのではなく、真の原因は他にあると主張した。

其数夥敷賤しき人が数少きよき物を用る故、事足らず。物の価も高直になる。又数多き賤敷人にも望に叶へ、よき物を用ひさせんとする故、其よき物も次第に粗相に成ゆく。

（中略）華美を好むは人情の常なるゆへ、制度なき故に、世は次第に奢に成行也。

（『政談』巻二、諸色の直段の事）

この短い資料で示した経済に対する徂徠の洞察は、丸山眞男がいう「身分的差別を嚴重に」させようとした、『『反動的』思想家』^[14]のものではなく、むしろ経済の本質を見抜いた上での発言である^[15]。

まず「其数夥敷賤しき人が数少きよき物を用る故、事足らず。物の価も高直になる」というのは、消費が拡大したのに対し供給が追いつかない場合、物価は必ず上昇する、という徂徠の考えだ。しかも、彼が次に述べていた「数多き賤敷人にも望に叶へ、よき物を用ひさせんとする故、其よき物も次第に粗相に成ゆく」という言葉は、需要を満たすために供給を拡大させれば、今度は「よき物」も「粗相に成ゆく」、つまり一般化するが、「華美を好むは人情の常なるゆへ」、次の「よき物」を狙うことになる。こうなると「世は次第に奢に成行」、供給は需要に永遠に追いつかなくなり、物価は一向に下がることはないのである。

この分析は今日の主流派経済学が主張する、市場における物価の自動調整メカニズムと似ているが、根本的な違いは、当時の生産力にある。また後述するが、近代以前は、技術的、物理的諸制約により、常に生産力が不足しがちである。ゆえに徂徠は今日の主流派経済学の論理に近い考え方に基づいて、物価が下がらない理由として、地方の生産力が十分に開発されていないために市場の自動調整が発揮されず、それ故に物価が高止まりすると説明している。当時の生産力を考えると、徂徠の認識は正しいと言わざるを得ないものである。

では徂徠の対策はどのようなものであろうか。抜本的な対策は「農本的自然経済であり、反貨幣経済である」^[16]と言われる、「旅宿の境界」をやめさせることである。これについてはまた後述することとする。

そして、対症療法的な方法は、次のような銭の大量鑄造である。

当時如何様の事をして世界を賑はすべきと工夫するに、銭を鑄るにしくはなかるべし。

（『政談』巻二、金銀銭の員数減少したる子細の事）

その理由の一つは以下の通りである。

惣て物の直段の至極に下直なるは、錢壹文に売る事にて、是より下直なる物なし。錢少く成て貴きとて、一文を二つにも三つにも割ては使はれぬ物也。

(『政談』巻二、金銀錢の員数減少したる子細の事)

当時、白石の意見を受け、正徳・享保の二度にわたる良鑄によって市中の通貨供給量が減少し、デフレ状態になっていた。しかし、前述の徂徠の意見「諸色の直段、元禄金・乾金の時分の半分より内にさがらねば、いまだ本の位に非ず」に従えば、デフレとは言っても、それは貨幣価値の相対的な上昇によるもので、実質的な物価は下がっていないと徂徠は認識している。そうなれば、まずやるべきことはマネタリーベースの回復以外になかったのである。

しかしその方法として金銀の再度の悪鑄ではなく、錢を大量に発行するように説く理由は、ここの「惣て物の直段の至極に下直なるは、錢壹文に売る事にて、是より下直なる物なし」にある。

すなわち、物価がいくら下がっても、発行されている最小貨幣以下の値段は付けようがないから、錢の為替レートの上昇は、商人に比べ錢遣いが比較的頻繁な武士たちにとっては、却って両替時に損をすることになって不利であると、徂徠は考えている。

この認識はのちに徂徠の高弟である太宰春台が受け継ぎ、発展させたのだが、小論の範囲外にあるため、今後の研究に譲ることとする。

3. 新井白石の貨幣観と遠隔地貿易構想

以上、新井白石と荻生徂徠との意見の相違を見てきたが、ここからはその思想的関連について検討する。

まず、両者の貨幣政策の対立はその思想に由来するといえよう。

新井白石は金銀に対する人々の信任が重要であると考えている。

当時のごとくに金には銀を雜へ候て、其品の上下をわかち、銀には銅を雜へ候て、其多少によりて、其品を種々にわかたれ候て、宝貨となされ候事は、本朝異朝つゝに其例を承及ばず候、某先年仰を奉り候て、大西洋羅馬国の人にあひ候時、万国の中にて通じ行はれ候金銀の事をも承り、其持来り候物共を見候にも、皆々むまれながらの物にて、其出候地方によりて、其品は同じからず候へども、銀銅などを以て金銀に雜造り候て、宝とし候事はなく候由、相聞候。しからば、当時のごとくに天地より生じ出され候人間の大宝を、人のなし、わざによりて其品を乱り候事は、天下人民の怨み憤り候のみにあらず、天地神明のにくみきらひ給べき事に候へば、不可然御事に候。(『白石建議』四)

当時、つまり元禄改鑄は本物の金銀ではなく、人工合金を作り出してそれを通用させた、これは前代未聞のことだと白石は批判している。また、「大西洋羅馬国の人」、つまり白石がシドチから得た情報でも、世界のどこへ行っても、「銀銅などを以て金銀に雑造り」のような国はなかったという。これにより、白石は自説に対し更なる確信を持ったことであろう。

そして、「人間の大宝を、人のなし、わざによりて其品を乱り候事は、天下人民の怨み憤」るところとある通り、このような政策は、一般大衆の貨幣に対する信認を失わせることにもつながり、到底容易く認めることはできないと主張している。実際の場合、出目の獲得も幕府が貨幣を改鑄する目的の一つであることは言うまでもない。こうなれば、貨幣に対する信任は失われ、市場も混乱する。前述のとおり白石は荻原重秀にはほすすべての責任を押し付けたが、それは立場上仕方のないことでもある。だが、ここの「天地神明のにくみきらひ給べき事」という言葉からしても、当時の幕政に対する白石の不満が募っていることがわかるであろう。

その理由は、白石の、あるいは当時一般の人々の金銀に対する認識や態度に由来するものだと思う。

凡そ金銀の天地の間に生ずる事、これを人にたとふれば骨のごとし、其余の宝貨は皆々血肉皮毛のごとくなり、血肉皮毛は傷れきずつけども、又々生ずるもの也【米穀布帛をはじめてもろもろの器物等皆しか也】骨のごときは一たび折れ損じてぬけ出デぬれば、二たび生ずるといふ事なし、金銀は天地の骨也。（『白石建議』六）

このように、白石は金銀を骨に例えて、いったん失ってしまったら二度と生じないものだと説明した。これは、当時の貴金属重視という世間一般の考えを利用して、幕閣を説得しようとする方策であろう。また、白石は前述の貨幣数量説に基づいて、金銀の海外流失に目を光らせている。

慶長六年より宝永五年迄百七年の間（中略）外国に入りし金は只今我国にある所の金の数三分が一に当たれり、銀は只今我国にある所の数より式倍ほど多く外国に入りし也。（『白石建議』六）

当家代をしろしめされて、海舶互市の事始しより、このかた、凡百余年の間、我国の宝貨、外国に流れ入し所、すでに大半を失ひぬ。【金は四分が一、銀は四分が三を失なへり。】（中略）我有用の財を用ひて彼無用の物に易むこと、我国万世の長策にあらず。

（『折たく柴の記』巻中^[17]）

当時、金山からの産出量は江戸初期に比べてすでにだいぶ少なくなっており、ただでさえ貨幣不足に悩まされた幕府にとって、金銀の流出は喫緊の課題の一つでもあった。ゆえに白石は我が国の「有用の財」と外部からの「無用の物」と交換することなど得策ではないと主張した。そこにみえる白石の姿勢は、同時期ヨーロッパの、金銀などの貴金属こそが富であるという重商主義者の考えと共通する部分があると認めることもできる。しかも、それは単なる半ばレトリックのような理由でなく、もっと現実的な構想があるからだ。

理由の一つは、白石が遠隔地貿易による物価の平準化を図ることにある。

奥羽等州，僻在東北，土曠而民稀，稻粱常有余而糶賤，貨財或未贍而価貴。如西南諸国，人衆而地不広，都会城邑，相望星羅，四民輻輳，浮食者多，土地之出，不足以給其人，則不免資輻運之給，以為養也。（中略）絡繹運送，以得易貨賄，而国以周贍，有無相濟，彼此相資，国家之利莫善焉。況瀕海諸国，商船市舶，涉海販鬻者，有所準式，往来不阻，雖窮郷絶域，蔑所不至焉。積貯優贍於上，交易博通於下，能使天下食貨，無甚賤甚貴之地，独漕運之功為多矣。

（『奥羽海運記』^[18]）

奥羽など東北各地では、「土曠にして、民稀なり」、ゆえに食料は有る余っているが、ほかの商品は少ないゆえ、物価は高い。逆に畿内のような「浮食する者多し」の都会では、外からの供給がないとまず食料は自給できない。両者が貿易を通じて互いに補うことこそ、「よく天下の食貨、甚だ賤しき甚だ貴きの地なからしむる」ことができる方法であると白石は考えた。そして、このような大口取引を行う遠隔地貿易にとって、決済に使われる流通貨幣に対する信任は必要不可欠である。

商賈の類錢四貫文腰にしがたく候へば、銀百匁も懷にし、銀一貫目懷にしがたく候へば、金廿両も三十両も懷にしつべきは、多少輕重を以て平準の法をたてられ候故に、其通行の滞りなきいはれにて候（中略）元禄以来金の品は古金・元禄金・今の新金三つにわかれ、銀の品は古銀・元禄銀・宝永銀・中銀・三宝字銀・今の新銀六つにわかれ（中略）当時は金銀ばかりも九品に相わかれたち候へば、其惣場定かね候て、天下の財用通じがたく候事は、其いわれなき事にはあらず候。

（『白石建議』四）

以上のように、元禄の改鑄によって通貨の混乱がもたらされ、「天下の財用通じがたく」

なってしまったことが、白石が金銀の信用を重視した、もっとも現実的な一因でもある。

4. 荻生徂徠の貨幣観と危機対応のための経済構想

それに比べて、徂徠は全く異なったスタンスを見せている。

通常、貨幣には三つの機能があるとされている。つまり、(1) 決済手段（支払手段）としての機能、(2) 価値尺度としての機能、(3) 価値貯蔵手段としての機能。この三つである。これについて、荻生徂徠はどう考えているのであろうか。

元禄に金銀に歩を入れてかねの性悪けれ共、銭の直段さまでかはらねば、慶長と金の位かはる事なし。当時元禄の金銀ふきぬきて性はよく成たれども、銭の直段元禄とかはらねば、是又元禄と金の位替らぬ事也。

（『政談』 卷二、金銀銭の員数減少したる子細の事）

金銀と銭との為替レートが同じであれば、流通貨幣の純金の含有量がいくら変化しても、金の位は「替らぬ」ということである。これはすなわち、徂徠は二種類の貨幣間の交換比率の変動にも注目していること、そしてそれによる貨幣の相対的価値しか認めていないことを示している。

そして、彼の次の主張から、徂徠が貨幣の決済手段としての流通機能を重視しているということが読み取れる。

近年かしかりの公事多くは相對に成て、大形捌かぬ事に成たるゆへ、金銀みな金持の手前にかたまりて、世界に流通せず。是によりて金銀の徳用うすく成て、世界の困窮したる筋有。

（『政談』 卷二、貸借の道の事）

ここで徂徠は「流通」という言葉を使い、流通が滞ることにより「金銀の徳用」が成り立たなくなると考えている。

さらに、(3) 価値貯蔵手段を比較的重視する白石と違って、徂徠は貨幣の価値貯蔵機能に対し、かなり懐疑的な態度を示している。その原因は以下の通りである。

今時のおろかなる軍者などは金をためる事を軍用とす。さよふの乱に至ては米払底になるものなる故、如何程金ありても土石を積みたるが如く、何の用にも立たぬ事也。

（『政談』 卷二、武家米を貯る仕形の事）

つまり、国防上の理由である^[19]。貨幣には相対的な価値しかない以上、その価値も状況によって変わるから、緊急時では土石のような何の価値もないものにすらなり得るのである。特に当時の輸送や保存手段を考えると、緊急事態の際、米などの必需品をすぐに調達できることなどは、到底考えられない。実際、宝永四年十月、宝永の大地震が起きたとき、幕府は軍用に貯めていた純金含有量の高い古金銀、つまり慶長金を出して、元禄金に铸つぶしたが、震災による物価騰貴はいかんともしがたく、徂徠のいうように大した役には立たなかったのである。

新井白石には、武士の戦闘要員としての性格を払拭しようという傾向がある^[20]。一方、荻生徂徠はそれと正反対に、武士は戦闘要員であることに、はっきりとした自覚を持っている。そのために彼は常に有事を想定している^[21]。また、『政談』を著した時代も『白石建議』より後で、幕府を取り巻く状況もかなり変化していたのである^[22]。

このように発想の根底にあるものの違いによって、徂徠の注目するところも白石のそれとは、おのずと違ってくる。

昔武家国々に居住したる時、左もなくんば武用をば何としてか弁ずべき。今は悉く御城下の町人の手に渡り、彼等が利倍となる故、武用の本色をわすれて殊外に粗相に成。此頃 公儀の同心、渡る鉄炮薬、用に立ず。同心共手前の銭を出して、町人を頼みて拵直してもらひ、稽古の鉄炮をうつといふ。かやうの事も武家はみな不案内になりたるは、以の外の事也。(中略) 太平の代にこそ買求て埒明べけれ。

(『政談』巻二、公儀御身上を直す仕形の事)

金を出して、商人に頼んでから、はじめて鉄砲が使えるようになる。このようなことは「太平の代に」しかできないのだと、徂徠は喝破した。このような不安定なシステムに国運を委ねること、徂徠の言葉でいう「商人なくては武士はたたぬ」ことなど、彼にとってあつてはならないことである。だからこそ、徂徠は先述の「旅宿の境界」をやめさせるという抜本策を提案した^[23]。なぜなら、当時の交通・通信・保存・輸送など諸般の事情を勘案すると、このシステムは緊急事態に対し、極めて脆弱なものと言わざるを得ないからである。

徂徠が理想としたのは、白石のそれとは逆の、貿易に頼らない自給自足できるモデルである。

富スト云ハ武士ト百姓トノ富ムコトナリ。武士ト百姓トノ富ト云ハ其国ニ米ヲ貯置クコ

トナリ。（中略）古ハ百工ヲ其国ニ仕立置テ是ヲ用ヒ、他国ノ百工ノ作タル物ヲ商人ヲ頼ミテ金ニテ買調ルコトハナカリシナリ。何事モ其国切ニ用ヲ足スヨウニセザルトキハ乱世割拠ノ時ニ至テヒシト手支ルノミナラズ、商人勢ヲ得ルユヘ物価次第ニ貴クナリテ国必貧クナルコトナリ。（『鈴録』第一卷、制賦^[24]）

ここでいう「何事モ其国切ニ用ヲ足スヨウニセザルトキハ乱世割拠ノ時ニ至テヒシト手支ル」とはその考えの簡潔な表現で、現代の言葉でいえば、「国民経済（ナショナル・エコノミー）^[25]」である。しかし、それと同時に、徂徠の武士土着論はそれだけで終わったわけではない。

錢を夥敷鑄出す時は、金銀の半減に成たるは、さまで苦にはならぬ事也。され共錢を鑄ふやしたる斗にて、旅宿の境界を不改、制度を立たずんば、当分の世界潤様なるべけれ共、只元禄の金銀其儘に手をつけず、やはり置たる心持なるゆへ、世界の奢又盛になりて、はては又困窮に可成也。（『政談』卷二、金銀錢の員数減少したる子細の事）

ここで徂徠は、どのような政策をとっても、たとえ錢を大量に鑄造し、マネタリーベースが回復したとしても、「旅宿の境界」を改めない限り効果は限定的であり、いずれまた「困窮に可成」と断言した。

「旅宿の境界」について、徂徠は次のように定義した。

武家を知行所に置ざれば、しまりの至極に非ず。そのみならず、武道を再興し、世界の奢を静め、武家の貧窮を救ふ仕形、此外更に有べからず。先第一、武家御城下に聚居るは旅宿也。（中略）其子細は、衣食住を初め箸一本も買調ねばならぬ故旅宿なり。

（『政談』卷之一、武家、旅宿の境界を改むる事）

「衣食住を初め箸一本も買調ねばなら」ないとは、つまり商品経済に依存する生活の事である。そして、このような依存から解放されない限り、武家の困窮を救うことだけでなく、武士本来の使命の一つ、すなわち緊急事態に対応する力も取り戻すことができないのである。

これと同時に、荻生徂徠の武士土着論の狙いはもう一つある。それは、誤解を恐れずに言えば、白石の全国的な流通網構築に対し、地方それぞれで完結した経済圏の構築といえよう。そして、当時の日本経済の状態は、先ほど説明した通り、需要の増加に対し供給が追い付いたわけではないから、全国的に物価が上昇せざるを得なくなってしまった。白石の構想はむ

しろ逆に経済規模をさらに拡大させることにつながりかねない。その場合は、さらなる供給不足に陥ってしまうのであろう。また、地方が十分に生産力を発達させないまま、全国の商品経済に飲み込まれてしまえば、地方は一層荒廃するだろう。ゆえに、遠隔地貿易に頼るトリクルダウン式の方法ではなく、まずは地方生産力の向上からするボトムアップ式の方法を徂徠は考えている。

この生産力の向上問題に対して徂徠が提示した解決策こそが武士土着論である。

知行所に差置に付ては、所を賑わす心懸有べき事也。(中略) 是は其地頭より下知して、或は桑を植て蚕をさせ、或は麻を植、漆をうへ、楮をうへ、惣て山を立させ、何に付ても地の利を見立て、所の賑ふ様なる仕形有べし。

(『政談』巻二、旗本諸士の困窮を救ふ制度の事)

ここで述べたように、武士を土着させることはローカル産業の振興にもつながると、徂徠は考えている。そして「旅宿の境界」から解放されることによって、需要は減少し、同時に供給が増えるのであれば、「世界を賑はす」ことになるのである。

そして、これも徂徠が金を大量鑄造するように主張した目的の一つであり、なぜなら地方経済の小口取引には大量の金が必要であるからである。

金銀は旅に自由に持る物ゆへ、遠方よりも早く帰る事なれ共、金は重き物にて旅を所持するには不便利なる物なる上に、田舎まで商人行わたりて、田舎の者共、今は物を買ふ事を知たれば、不断の小用は金にてたす事なる故、金はみな其所々とどこほりて、御城下へは帰るかぬる事也。是によって金の員数減少せず共、商人の広く行わたるほど、金は引はりたらぬ道理にて、不足する事也。

(『政談』巻二、金銀金の員数減少したる子細の事)

ここで徂徠は金の流通が拡大したために金が足りなくなつて、絶対数が不足すると説明した。そうするとローカル経済の活性化にも支障が生じる、故に彼は「世界を賑はす」ためには、「金を鑄るにしくはなかるべし」と考えたのである。こうすれば地方で完結した経済圏を作る貨幣の基盤が出来上がる。そのゆえに、徂徠は地方それぞれの金鑄造を認めるべきだと説いている。

扨ては金は道中を運ぶ事不便利なる物なる間、大名の城下々々にても心儘に鑄すべき

事也。異国にても錢は国々にて鑄て、其国の名を裏かたに附くる事也。

（『政談』巻二、金銀錢の員数減少したる子細の事）

最後に、武士を土着させれば、米を換金しなくて済むので、市場における需給関係を逆転できることも、徂徠の狙いである。

武家にて米をしめをく時は、商人も米を食せずしてはならぬ事故、商人殊の外に迷惑して、諸色の直段心の儘にさがるべし。是は主客の勢といふ事也。当時は旅宿の境界なる故、金なくてはならぬ故、米を売て金にして、商人より物を買ふて日々を送る事なれば、商人主となりて武家は客也。故に諸色の直段、武家の心儘にならぬ也。武家みな知行所に住する時は、米をうらずして事済む故、商人米をほしがる事なれば、武家主となりて商人は客也。されば諸色の直段は心儘になる事也。

（政談』巻二、武家米を貯る仕形の事）

このように、徂徠の経済政策は武士土着論を単なる議論に終わらせず、実践するために用意された政策であることが分かるであろう。

5. 「経済」としての武士土着論—土地に根差す思想—

以上、新井白石と荻生徂徠の貨幣をめぐる議論をみてきた。本稿で最初に述べた結論の通り、意見こそ相反するものの、両者とも経済に対する深い認識を有すると同時に、当時の生産力やインフラ状況など、諸般の現状を考慮し、分析した上で政策立案をしたことが分かる。

徂徠学における現実的な社会経済に対する意見主張といえば、『政談』を取り上げざるをえない。しかし、今までの研究のほとんどが、以下の二つの点を見落としている。

一つは、『政談』の性格である。すなわち、この書物は吉宗の諮問に対する改革の意見具申である。また、新井白石の『白石建議』も同じ性格を有している。つまり、この手のものは最初から完成した理論体系というより、將軍や幕閣に提出するプランであって、読み手をいかにして納得させるかという工夫がなされている。そこには非合理性や非整合性が、必ずと言っていいほど含まれている。そこに書かれた内容を即座に著者の思想とすることは避けるべきである^[26]。

そしてもう一つ、より重要な問題は、事象の前提条件である。本稿冒頭部分で引用した渡辺氏の結論をもう一度想起してほしい。氏は徂徠の思想を「反近代」のものであり、「反進歩・反発展・反成長・反都市化・反市場経済・反自由・反平等・反啓蒙・反民主主義」の姿

勢を貫いたものとしてとらえていた。筆者は、ここでこの一連の「反」に対する逐条反駁を行うつもりは全くない。なぜなら、この結論の前提条件が違うからだ。確かに、今まで引用した徂徠の意見からもわかるように、現在の我々が現在の感覚で『政談』を読めば、この結論と同じ意見を持つこともできるだろう。しかし、当時の客観的諸条件、すなわち前述の当時の交通・通信・保存・輸送など諸般の事情を前提として、これをもう一度よく考えてみたい。

白石のいう都会の「浮食する者」とは、文字通り農業生産に従事しないただ食料を消費するだけの町人のことである。その上、数も多いから、外からの供給に頼らざるを得なくなる。しかし、当時の保存手段や輸送手段を考えると、いったん不作や天災、あるいは戦乱等によってインフラが遮断された場合、その都市の「浮食する者」たちはただちに飢える危険性に直面する。それに加え、物流も金融もすべて商人によって支配されているのであれば、暴動が必ず起こることは、火を見るより明らかである。

当時御城下に数百万の人を集め置き、諸国の米を悉く御城下へ運び来りて食費す。当分は賑かに繁昌に見へて目出度事なれ共、奥筋に事あらば仙台の米は入まじ。西国に事あらば上方の米は入まじ。其時は御城下の民、食にかつへて騒立んは、何と静ても静がたかるべし。飢に逼りては何事をせんも斗がたし。七年の疾に三年の艾といふ事有。其時に至りては、せんかた更に有まじき也。諸大名の米も皆商人に売渡したれば、諸国にて其時は難儀甚しかるべし。是等の事も世の末に成ては必無之事に非ず。

(『政談』巻之一、戸籍の事)

吉田氏の前掲論文に、この部分を引用して次のようにある。「享保十八年（一七三三）一月二十五日に、西国筋での飢饉のために起きた、江戸で最初の打毀を予言したものとして有名な一節であるが、こうした治安上の意味からも、江戸一極集中は避けるべきだと考えたのである。^[27]」しかし、この一節は「有名」とされながらも、従来あまり重視されてこなかったように思われる。吉田氏も、この一節に対しては、その「江戸一極集中」については評価したものの、肝心の「前提条件の違い」にまではたどり着いていないのである。

この「前提条件の違い」から、なぜ徂徠が土着にそこまで執着するのが、よく見えてくるはずである。人類史上のほとんどの時期において、社会は常に需要超過と供給不足に悩まされている。しかも、それは現実問題として経済の発展を妨げている。

活板といふもの調法成物なれども、是又御当地などにては工手間かかるゆへ、板をほる

よりは却て損也。石摺もまことの仕形は工手間かかるゆへ成がたし。織物の類を京都にて織出せるも、是も唐のごとくすれば物入多きゆへ、何れも薄く織出して唐には劣る。是みな店賃高く諸色高直成ゆへ、何事も何事もかかり物おほく成て、よき物は出来せず。

（『政談』巻二、旗本諸士の困窮を救ふ制度の事）

城下町における人口の激増は、土地代と物価の高騰、すなわちコスト増をもたらし、それによって「よき物」はよりいっそう作り難くなる。これを第2節で引用した「数少きよき物を用る故、事足らず。物の価も高直になる」と照らし合わせて考えると、徂徠の目には、当時の経済環境が悪循環に陥っているように見えたと考えられる。これでは、産業が育てられるはずがない。

この問題に対する解決法は、いかに需要を抑え供給を増やすかに尽きる。それはつまり、武士土着論である^[28]。「旅宿の境界」をやめれば、需要は抑えることができる。また、前節でも引用した通り、徂徠の武士土着論はただ地方に住まわせるだけではなく、「地の利を立て」地方の生産を増やすことにもつながるシステムの構築を考えたのである。

古より民の治めに勸農といふ事の有はこの事也。水戸の義公、水戸にて紙をすかせ、茶を作らせ、海境の川にのりを仕付け、白魚をまき、種々の事を被仰付て、昔は水戸になきもの今は出る也。又亀井隠岐守が家老の了簡にて、先年石見に木のまがり多を考へ、鞍打を招寄、鞍を為打、それより津和野に鞍出来し、隠岐守、諸方への音信にも是を用ゆ。此様なる類の事いくらか有て、民の為地頭の為、賑かに可成也。

（『政談』巻二、旗本諸士の困窮を救ふ制度の事）

土地の生産物とそれによる地方産業こそ、相対価値しかない、つまり価値が変動する貨幣よりも、もっと確実な「富」である。これによって、徂徠の「富ト云ハ其国ニ米ヲ貯置クコトナリ」という言葉を理解できよう。いわば、土地の生産物を最優先にする、「土地に根差した」思想である。

渡辺氏は、先述の通り、このような徂徠の思想に一連の「反」を突きつけ、断罪した。しかし、徂徠と似たような思想を持つ人間が時代を少し降ったヨーロッパにもいた。近代経済学の祖とされたアダム・スミスである。

ここで荻生徂徠とアダム・スミスの比較研究をするつもりはない。また、スミスのおかれた「前提条件」は徂徠のそれとかなり異なるゆえ、簡単に比較することもできない。しかし、時代の制限によって概念すら整備されていないと同時に、体系的に整っていない徂徠の理論

に比べ、スミスのそれは共通の概念に基づいた体系だった理論である。したがって、徂徠の思想をより理解しやすくするために、以下にスミスの思想を多少引用することで、説明の一助としたい。

周知のように、アダム・スミスは重商主義を批判した。スミスは「ルイ十四世の有名な大臣であるコルベール氏」の政策に対し、「彼は、他のヨーロッパの大臣たちと同様に、農村の産業よりも町の産業を奨励しようとしたばかりでなく、町の産業を支援するために、農村の産業を衰退させ抑圧しようとした^[29]」として、都市を優先する政策に否定的な意見を示した。スミスには「ものごとの自然のなりゆきによれば、あらゆる発展しつつある国の資本の大半は、まず農業に、のちに製造業に、そしてすべての最後に外国貿易にむけられる^[30]」という有名な考え方がある。これによれば、農業が発展したのち、製造業も「自然」と発展していくはずである。したがって、都市を優先する重商主義は、スミスからすれば「自然のなりゆき」に反することである。しかし、現実では「ものごとのこの自然の順序は（中略）ヨーロッパのすべての近代国家では、多くの点で完全に転倒されてきた^[31]」。

そもそも、『国富論』を素直に読めば、スミスが重農主義に対し、好意的であることが分かる。「もし人間の諸制度がその自然的性向を妨げることがけっしてなかったならば、町は、どこでも、それがおかれている領土の改良と耕作が維持できる以上には、少なくともその全領土が完全に耕作され改良されるときまでは、増大しえなかつたろう^[32]」とスミスはいう。経済だけでなく、そのすぐ後に彼は「農村の美しさ、田園生活の楽しさ、それが約束する心の平穏、そして人間の諸法の不正義が妨げないかぎり田園生活が実際に提供する心の安らぎ、これらは多かれ少なかれ万人をひきつける魅力をもっている^[33]」ものだと、情緒的なところでも農村を礼賛していた。

徂徠はこのようにはっきりとした「自然」の発展順序を提示したわけではないが、農村を重視し、最優先すべきという点でスミスと一致している。その方法は、まさにスミスのいう「自然」である。スミスは「全領土が完全に耕作され改良されるときまでは」、町は「増大しえな」いものとし、彼からすれば、国家の介入がなければ、投資資金はまず農村へ行くのが「自然」である。同様に、徂徠からすれば、国家の介入、すなわち「全領土が完全に耕作され改良される」前に、「自然」の順序に反して行政命令で武士たちを城下に集住させなければ、彼らも「自然」に自分の知行地を「耕作」し、「改良」して、発展させるだろう。

そして、スミスも徂徠と同じく、貨幣は単に物々交換をより円滑にするための交換手段でしかないと考えていた^[34]。これは不換紙幣を日常的に使っている我々にとって、何ら変哲もないことだ。しかし、重要なのは、スミスはまた徂徠と同じく、もっと確実な「富」が存在すると考えていることである。スミスは「商人の貯えは、製造業の貯えと同じく不妊で不

生産的である^[35]」とし、そして「土地の生産物がすべての国の収入と富の唯一の源泉であるとする体系は、私の知るかぎり、どの国民によっても採用されたことがないし、現在はフランスで、大きな学識と創意をもった少数の人びとの思索の中に存在するだけである^[36]」と述べた。つまり、ほとんどの人が「土地の生産物がすべての国の収入と富の唯一の源泉である」ことを理解していないのだが、スミスからすれば、それこそがすべてなのである。これはまさに徂徠の「土地に根差した」思想と共通しているのだ。

以上、徂徠とスミスの思想の類似点を検討した。この類似の意味するところを少し考えていきたい。重農主義的な考え方は、洋の東西を問わず、古くからあったものだが、スミスの生きた時代は、ちょうど第一次産業革命の時期と重なっていた。なのに彼もまた、都市の産業を優先する重商主義に対し、土地の生産物を最優先すべきと考えていた。このことは、ある事実を我々に示しているのではなかろうか。すなわち、少なくとも第一次産業革命までは、一見華やかな商品経済よりも、農村産業を重視するよう訴える思想と社会的要請が存在していたということである。そして、徂徠の武士土着論も、この社会的要請を踏まえてのものである。

終わりに

丸山眞男以来の近世思想史研究は「一つの歴史哲学的ストーリーのうちに構成されたもの^[37]」であり、西欧における近代化の過程を前提として、それと照らし合わせることで、江戸時代の日本思想から「近代性」を見出す方法である。しかし、このような「ストーリー」を徂徠に読み込むこと^[38]では、徂徠や江戸時代の他の学者たちの思想展開とその根底にある現実問題に対する思索の軌跡をすべて捨象してしまう危険性がある。したがって、本稿は、このような丸山史学とは全く別の、当時の社会的諸前提に基づいて、荻生徂徠の経済構想に対する分析を試みたのである。

ここまで論じてきたように、新井白石は貨幣数量説的な認識を持ち、金銀品位の下落ではなく供給量が多いから物価が騰貴したと考え、そして、貴金属の海外流失を防ぐという、重商主義者の発想に近いことを主張した。その理由は遠隔地貿易による物価の平準化を重視するという彼の姿勢にあるに違いない。

対して荻生徂徠は、物価の変動は貨幣的現象ではなく、需要と供給の変化によるものと考えている。また、銭に関する議論から、曖昧ではあるが、二種類の貨幣間の為替レートの変動が経済活動に影響を与えることに気づいていたことが読み取れる。さらに武士としての自覚を持つ徂徠は、常に非常事態に備えることを重視し、自己完結型社会システムを構築するよう主張したことがわかる。このことは徂徠の有名な武士土着論と密接な関係を有すること

を、ここでもう一度強調しておきたい。

この考え方が土地に根差した思想であることはすでに述べた。そして奇しくも、重商主義を批判するアダム・スミスの思想と幾分共通している。スミス思想の根底にある道德哲学も、結局のところ「土地」という確実なものに基づいている。しかし、この問題に関する研究は本稿で扱う主題ではない。また、先述の通り、『政談』はあくまで改革のためのプランであり、将軍を説得するためのものであるため、そこに整合性が欠落していることは否めない。徂徠の経済構想をまとめ、体系の整った理論にまで発展させたのは、太宰春台の『経済録』を待たなければならない。それも稿の範疇から逸脱するゆえ、今後の研究課題としたい。

注

- [1] 『社会科学研究』39(1), 1987.8。
- [2] 尾藤二洲『正学指掌』（『日本思想大系』三七，岩波書店，1978）。
- [3] 平石直昭前掲，P.68。
- [4] 丸山眞男『日本政治思想史研究』P.123（東京大学出版会，1952）。
- [5] 小室正紀「西欧経済思想導入以前の日本経済思想」八木紀一郎編『非西欧圏の経済学』第2章。
- [6] 渡辺浩『日本政治思想史』P.197（東京大学出版会，2010）。
- [7] 吉岡孝「荻生徂徠『政談』の構想と社会的実践の可能性」P.1（『國學院雑誌』第112巻，第4号，2011。所収）。
- [8] 吉田俊純「荻生徂徠の経済論」P.238『筑波学院大学紀要』10（筑波学院大学，2015）。
- [9] 同前P.238。
- [10] 例えば，寺出道雄「新井白石の貨幣政策論：『白石建議』を読む」（『三田学会雑誌』106(1) 2013.04）において，寺出氏は『白石建議』の内容を引用したあと，「以上では，『貨幣数量説』的な貨幣論が述べられている」と述べている。
- [11] 『新井白石全集』第6巻。（国書刊行会，1907.4）以下同じ。
- [12] 『白石建議』（一）において白石は「金銀の品善悪を論じ候事など，武家におゐて一向に其沙汰なき事にて，此事申出し候ものは，両替仕る者共金銀の品に次第をたて両替の事につきて其利をもとめ候はんための姦計にて候，商人共も其説にまどひ候て終に天下の難儀とは罷成候」と述べ，品質の問題は両替商の「姦計」としていたことから，白石は貨幣の品質が問題であるのではなく，むしろ流通量の過剰が問題であると考えている。
- [13] 『政談：服部本』。（平凡社，2011.9）以下同じ。
- [14] 丸山眞男『日本政治思想史研究』P.220（東京大学出版会，1952）。
- [15] 吉岡孝氏はこの「制度」について以下のように論じている。「現代に生きる我々には，かなり違和感がある。だがそれは無限の生産力拡大を妄信する資本主義下に我々は生きているからである。産業革命前の低度な生産段階における身分制社会はむしろ普遍的な考えであった」（吉岡孝前掲論文，P.6）。これに関しては後述する。
- [16] 丸山眞男『日本政治思想史研究』P.45（東京大学出版会，1952）。
- [17] 『折たく柴の記』（岩波文庫，1999）。
- [18] 『新井白石全集』第3巻（国書刊行会，1906.1）。
- [19] 片岡龍氏は「いわゆる徂徠学の形成に，これらの三書の兵学的著述が果たした影響の大きさを無視することはできない」（片岡龍「荻生徂徠の初期兵學書について」（『東洋の思想と宗教』第

15号、P.140、1998。所収）と述べ、徂徠の思想形成自体が彼の兵学と不可分のものであるとする。また、片岡氏のいう「三書」、すなわち『素書国字解』『孫子国字解』『呉子国字解』以外にも、徂徠は『西洋火攻神器説国字解』『四車記解』などの注釈のみならず、オリジナルの兵法書として『鈴録』と『鈴録外書』を著すほどである。さらに、服部南郭は『孫子国字解』の序の最初に「今政は軍令に寄す（今政寄軍令焉）」と認め、幕府は軍事組織であることを強く意識している。また、前田勉氏は『近世日本の儒学と兵学』（ぺりかん社、1996）の第三章「徂徠学の原型」において、『孫子国字解』を徂徠学の原型とみなしていたが、その是非については、本稿の範囲外ゆえ省くこととする。

[20] 宮崎道生は「白石・徂徠の重大な相違点として付言しておくべきは『孫子』の解釈に見られる白石の平和主義と徂徠の軍国主義である。これは施政方針の基本にかかわることである」（宮崎道生『新井白石の人物と政治』P.225。吉川弘文館、1977）とした。その評価の可否は本稿の主旨から外れるため、ここで論じることは出来ないが、このような対置は古くからあったことを指摘しておく。

[21] 白石は徂徠のこうした姿勢を批判して、佐久間洞巖あての手紙において「今も世の中にあけてもくれても孫呉の兵法を以て治世を治め候はんとて機変の巧を用ひ」あるいは「さる一人孫子を以て自負し伝授のことなど候ひしと聞へ候にとかく今日大平之世の政事をも孫子の心得にて人を詭り欺きみづからの私智を以て生民を愚」（『新井白石全集』第5巻）かにするものであると反発している。つまり、「治世を治め」る、すなわち平時と有事の時の施政は、それぞれ別であると認識している。

[22] 拙著「荻生徂徠の幕藩體制改革構想：勳階制導入構想に見える危機意識」（『東洋の思想と宗教』第31号、2014）に参照。

[23] この問題については、拙著「荻生徂徠の『政談』と『鈴録』について：武士土着論とその背景にある危機意識」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』58、第1分冊、2012）に参照。

[24] 『荻生徂徠全集』第6巻（河出書房新社、1973.7）。また、字体は常用漢字に改めた。

[25] もちろん、江戸時代の当時では、「国民」という概念はなく、徂徠が理想としていたのは、当時の交通条件のもとで経済的に自己完結できる地域共同体、すなわち「地域経済（ローカル・エコノミー）」である。

[26] 例えば、村井淳志氏は『勘定奉行荻原重秀の生涯』（集英社新書、2007）の中で、『白石建議』について以下のように述べている。「天災がうち続くのは、貨幣改鑄という間違った政策のせいだといった呪術的な独断に陥り、さらには、家康時代の幣制に戻せば、家康時代のように金銀生産量も増加するかもしれないといった、荒唐無稽な議論にもつながっている。」（P.188）しかし、白石の著作全般を通覧してみれば、彼がこのような考え方を持っていたとは、とても考えられない。

[27] 吉田俊純前掲論文。P.223。ただし、吉田氏が引用した『政談』のテキストは『荻生徂徠』（日本思想史大系、1973）所収のもの。

[28] 武士土着論は熊沢蕃山をはじめ、幕末まで江戸時代の経世論のメインテーマの一つである。その総括的な研究はケイト・W・ナカイ氏の「武士土着論の系譜」（『岩波講座 日本通史』第13巻、岩波書店、1994）がある。ただし、ナカイ氏の「蕃山の思考が、常に『内』（内政問題）から出発して『外』（防衛問題）に向かうのに対し、泰平の世に生きる徂徠の関心は、逆に『外』から『内』へ向かう」（前掲P.309）というパラダイムには、筆者は賛成しかねる。また、蕃山の土着論は「体験上の根拠をも有するもの」（川口浩『江戸時代の経済思想』P.42、中京大学経済学部、1992）であるという指摘があるが、これと同様に、徂徠も上総にて12年間（13年という説もあるが、ここは平石直昭氏の『荻生徂徠年譜考』に従う）の農村生活を送った。この実体験が彼の

思想に甚大な影響を与えていたことは、すでに先行研究によって指摘されている（黒川真「荻生徂徠—差異の諸局面—」『現代思想』第10巻第12号，1982）。

- [29] アダム・スミス『国富論』3, P. 300（岩波文庫，2001.3）。
- [30] アダム・スミス『国富論』2, P. 189（岩波文庫，2000.10）。
- [31] 同前 P. 189。
- [32] 同前 P. 185。
- [33] 同前 P. 186。
- [34] 『国富論』第一篇・第四章「貨幣の起源と使用について」を参照。
- [35] アダム・スミス『国富論』3, P. 306（岩波文庫，2001.3）。
- [36] 同前 P. 299。
- [37] 子安宣邦『「事件」としての徂徠学』。P. 22。（ちくま学芸文庫，2008）。
- [38] 同前。

（キョ カセイ 学習院大学国際研究教育機構 PD 共同研究員）

The Economic Concept of Ogyū Sorai: Comparative Analysis with Arai Hakuseki

Jiasheng Xu

Abstract

This paper analyzes the economic concepts of Ogyū Sorai and Arai Hakuseki. Hakuseki, who has a kind of perception based on money quantity theory, claims that price stability is achieved by adjusting the monetary base, and prioritizes the leveling of prices by remote trade. Sorai, on the other hand, argues that a fluctuation in prices is not due to a monetary phenomenon, but to the demand and supply relationship, emphasizing the enhancement of local production. Furthermore, his awareness of being a samurai and always valuing preparation in the case of an emergency led him to devise the formulation of a self-completion type of social system: samurai indigeneity. It is this concept that is rooted in the land, a commonality it shares with the concept of Adam Smith.